

●「槇」(千葉県) 45号

「槇」は、過去をしつかり捉え、時間の流れを引き受ける存在としての人間に根差した筆の輪郭がある。その筆力の中に過去が燦然と蘇り、現在に働きかけてくる。これは主宰者の精神と姿勢に拠るところが大きいと思われる。根力がある。

「慶長十八年 終わりの始まり」(岸本静江)は、いかに豊臣家を終焉させるか、慶長末期の家康の計画とその周辺の事情を手堅くまとめている。以前から伊達政宗がなぜわざわざヨーロッパに使節を派遣したのか、なぜそれをまた家康が許したのか、事情を知りたかったが、その疑問をこの小説は明快に説いてくれる。家康にすれば煩わしい外国勢力の一掃を図りたかったことも、政宗の関心を外へ向けさせたかったことも、確かに納得できるし、ヨーロッパへ日本人が初めていく快挙・壮途の背景をあらためて知ることができる。また豊臣秀頼の器量への恐れも、それを潰して、豊臣家を壊滅させる企みも、よく家康の内面に入って描き出している。関ヶ原の戦い以後の、江戸幕府を固めるための陰謀の進みが、手際良

興が冷めるものの、この簡潔な象徴性は、室町中期の乱世の中の抽象性を抽出している。タイトルは無造作に投げ出すような感じで、このぶつさらぼうさは、室町中期の優れた象徴性に離反している観があるが、推薦作。

この誌は過去を大事にし、それを現代に蘇らせて生き生きとした息吹を与える一貫した姿勢があり、その方針がそれぞれの作品に結実している。「桜花忌」(萩原紫香)は、戦争直後のアメリカ兵によって生活を得ていた女性の姿を、自身の幼年の頃の記憶として描いていて、その活写は子供の真っ直ぐな、そして残酷な眼差しによって、生き生きと再生されている。パターンに陥りやすい時代構造を、真っ直ぐな視線のリアリテイとあたたかな回顧が救って、一人の戦後に生きる女性の姿を鮮明に焼き付けることに成功している。最初に梶井基次郎のポピュラーな一句は邪魔。必要なく、かえってこの女性を貶めている。優秀作としたい。

「過ぎたるは」(麻生悠子)も、介護の現実を扱っているものの、沈鬱にならずに飄々と目まぐるしい日常を描いていて、むしろ気持ちのいい爽やかさがある。これほどまできちんと項目に分けてスムーズに処理していく手際にも感心させられ、介護に明るい風が吹いている。しかしあまりの手際良さを介護される側から最後にちよっと注文がつくのだが、この快い風を小説として描出した手

く記されていて、家康の深謀遠慮が浮かび上がってくる。細かい史実を集めて掘り起こし、構築再生する力は大きなものを感じる。読ませる力を含めると推薦作レベルではある。

夢酔藤山の「地獄と坊主」には、並々ならぬ筆力を覚えた。歯切れのいい短い文の展開には、その奥をしつかり捉えた省略の妙があり、それが奥行の深さを湛えつつ、軽妙なりズムで進んでいく。これは奥に哲学をよく把握していないとできない文章で、本物の洒脱を体現している。一体の奇矯を強調し、遊女の姿形を純化しすぎることは、今後の展開に苦しさを敷き、終わりになって遊女が山名宗全のスパイだったことが明らかになると少し

柄は大きい。もう一度読みたくなるような親しみがある。準優秀作。

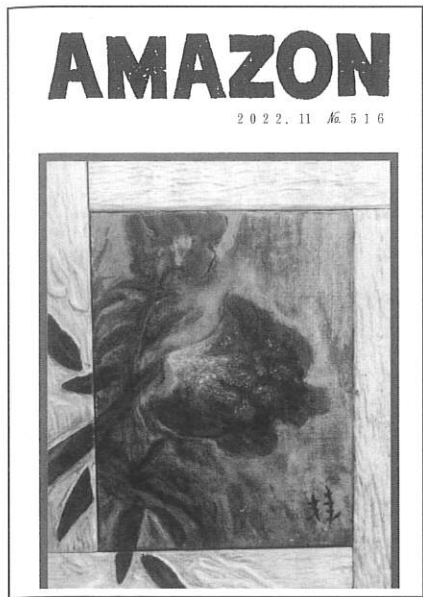
主宰の乾浩氏は歴史小説「多古城悲話」を載せているが、この小説に、歴史と過去への一貫した姿勢が結実していて、誠実な筆致に、同人誌のあり方そのものまで問いつけられるような、廉潔な態度を覚える。作品そのもののストーリーは地方の武家の勢力争いによって滅亡に追い込まれる若武者たちを追っているのだが、その背景も丹念に調べていて、一四〇〇年代後半の室町幕府下の地方の状況がよく浮かび上がってくる。幕府の権力が地方に及ばない事情や、裏切りと野心とこれまでの秩序を覆す力が渦を巻いていく有様が克明に記されていて、乱世から戦国時代へ移っていく様子が鮮やかに伝わってくる。この時代でもすでにかなりの大軍が動員され、武器を蓄えるなど、軍事的ダイナミズムが渦巻いていることは、新たな知識となった。当時の関東管領の役割も実力も、この生きた動きのうちに確認できた。戦闘・斬り合っている場面も迫力がある。また自刃する際に辞世の歌を詠むことも、この時代にはまだ生きていて、それがいっそう嘆きを深めている。労作であり、推薦作としたい。

●「AMAZON」(兵庫県) 516号

五一六号という号数にはあらためて驚かされた。この号数は「詩と真実」八七〇号、「バイキング」八〇〇号、「北



斗」六九七号、「樹林」六九二号、「九州文学」五八〇号に続く第五番目の継続を示している。一九六二年の創刊なので、六十年を越えている。素晴らしい持続である。巻末の「案内」にも「どのような方法の作品であっても、今を生きる時代や日本と世界の状況とどう係っているのか、なぜ今、その作品を書きたいのか、書かなくてはいけないのかを大切にしている」とあるのも、心を引かれる。「淡水湖の中の朝鮮」（申玄虎）は、エッセイともモノローグとも、主張や回想とも取れる、型破りの形式だが、かえってそこに力がある。型にとらわれすぎて、真の力を失いがちな昨今の小説よりも、訴える力は大きく、ハッとさせられる。「私は在日韓国人二世なのだが韓国、



日本の朝鮮支配がなかったら、北と南に分かれることはなく、朝鮮戦争で同じ民族が殺し合い、血を流し合う悲劇は起こらなかっただろうと思うが故である。その罪は千年経っても消えることはない。それと同じ思いをここで直接共有したのは、うれしかった。あらためてこの歴史事実を振り返ると同時に、その認識と断罪を共有する重要性を感じた。

またこの抗日ゲリラのリーダーの一人に金日成がいて、彼に目をつけたソ連が彼を育てて、その後の社会主義王朝の家系を築いたという話も、新鮮に読めた。さらに「起きてしまったことを取り戻すエネルギーはそれを阻止するための努力のいく数倍あっても不可能に近い」という真理、「私にとっても人間や人種間の境界はないし、まして国家の境界もない。むしろそれぞれの文化、習俗の特徴が混ざり合う渾のような雰囲気が好きだ」という提議も導く力を有している。言葉の把握力に魅力がある。いつか朝鮮特集も組んでみたい誘惑を覚えた。部分的にも推薦作。

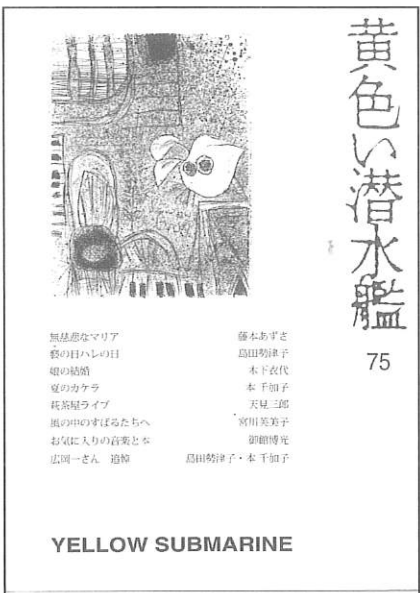
「青き島々」（申鉉寛）も朝鮮半島の歴史を扱っていて、興味深かった。特にモンゴルの台頭によって、朝鮮半島が脅かされ、王朝が揺さぶられてやがて敗北した者たちが、九州や沖縄に流れ着いて、そこで新たな胤を生んでいくその混沌と漂着の流れは興味深かった。大国がこの

日本の選挙権も被選挙権も持たない」から始まって、「幸せには日本人、韓国人、何々人と関係があるんだろうか」と、ガツンとやられ、「日本の中で朝鮮大学に門戸を開いている企業はほぼなく北朝鮮くらいだろう」「彼ら（三世）にはどこの国でもよいから仕事を与えてくれる現実的なニーズこそが尊いのである」とリアリズムで蹴飛ばされる。そこから歴史を溯って、日本が朝鮮に手を伸ばした時代から、日清・日露戦争を経て、李氏朝鮮の閔妃を殺害して野心を拡大していくことにストレートに言及する。明確に歴史の中で日本の罪悪性をえぐっている部分には、特に共感した。

「もし朝鮮が日本の支配を受けずに独立国として現在まで続いておれば、歴史は全く違う様相を示したであろう」「大陸に足がかりを持たない日本は日中戦争に入ることもなく、もちろん太平洋戦争も起こらなかったに違いない」「日本が大戦に敗北するとアメリカとソ連によって南北に引き裂かれた朝鮮はやがて国内戦争によって焦土化し分断の道へ進む」「断絶の歴史が始まった」と書くこの部分の認識を、私は三十年前から自分の中に抱いていた。同じ思いを二世の方から直接聞いて、深い共鳴感を覚えた。日本は二十世紀にアジアの国々に大きな罪を犯したが、朝鮮半島には、その数倍の罪を犯していることを痛感していた。それはここに述べられた、もし

ように小勢力を飲み込んでいく歴史もよく表現している。前半の正体不明の女性性は際だっていたが、後半の歴史叙述と繋がりが見えず、流れてしまっているのが惜しい。漂着には大きな物語があり、それが映す歴史の大きさは、よく表現されている。またこの記述の前半の一部には、近代の阪神工業地帯の発展は、沖縄や朝鮮半島からの人々の労働力にもよっていることが窺われる。歴史物語としての部分的推薦作としていつか朝鮮特集の中に組み入れて多くの人に読んでほしいとも思っている。

ボリウムでは高森嗣氏の「石と水の女帝 宝皇女／巻三 皇極女帝」が圧倒的で、大化の改新を舞台裏の生き生きとした肉付けをして再現しており、歴史から物語を浮かび上がらせることに成功している。「日本書紀」に依拠しながらも、これだけ人物たちを生き生きと躍動させて、歴史を動かして見せるのは、よほどな技量がないと難しい。史実を歴史として刻むだけなら、これほどまでに人が躍動しないだろう。歴史事実に息を吹き込むその再現力には、並々ならぬ力が感じられる。しかもこれは部分で、もつと大きな編成がなされているようにあり、この企図に雄大なものを感じる。これはNHKの日曜歴史ドラマなどになってもおかしくない組み立てを有している。長いものの総体はもつと別に評価されるべきと思うが、とりあえずこれだけでも推薦作である。



●「黄色い潜水艦」(兵庫県) 75号

この誌も長い継続の中に芯を感じさせる。ピートルズの曲名に「黄色い潜水艦」というのがあるので、ついそのイメージにとらわれてしまっただけで、これほど同人雑誌としての活動に充実した実績を備えているとは思わなかった。偏見を謝罪したい。

「無慈悲なマリア」(藤本あずさ) は、ALS (筋萎縮性側索硬化症) で動けない女性を、飼い犬の相手をするこゝとで手助けするボランティア活動を軸に、うまく作品にまとめている。「眼球以外は指一本すら自分の意志では動かすことができない」病人の現実、犬を通して接するその触れ合いが、ソフトに明るく描かれている。普通

舞台の表と裏と、また実生活の生々しい一面と、二重の構造が演劇空間そのものとして立ち上がってくるおもしろさは感受できる。ただ、チェーホフの「桜の園」に寄りかかりすぎる点、もう一つ劇的なものを加えたかった点に、結晶感の弱さも覚えた。準優秀作。

学生運動を回顧した作品「夏のかげら」(本千加子) は、素直に過去を振り返っているのが、好感を持てる。本音も含んだこの自然な叙述は、抵抗なく読み手の胸に入ってくる。全共闘世代の底に流れる時代の追憶を簡単だがよく表出していると思った。力まないこうした叙述の中に、真実の雫が落ちてくる。

「風の中のすばるたちへ」(宮川美生子) は、この誌の75号までの履歴を、人物を軸に記録していて、貴重である。前身の「燃える河馬」からの来歴も丁寧に綴り、当時の同人雑誌の活気や熱気をよく留めている。富士正晴も出てくるし、万国博やペ平連も出てくる。大阪文学学校との繋がりも散見する。それらの時代を経て「黄色い潜水艦」が創刊され、様々な人の参加や活躍の中で、現在に至っているその道筋がよくわかる。この類のものはただ記録に終わることが多いのだが、この文章は読み進めていくこと自体におもしろさがあり、奇妙な魅力がある。それは出てくる人物に情熱としての躍動感があり、それが文章にも反映されていて、期せずして同人雑誌の魅力

はこういう素材を書くとき重くなつてなかなか身動きが取れなくなるのだが、自分の犬と相手の犬がよく描かれていて、ほどよく明るめに中和されている。そして逆にそれによって、患者である相手の意志や考えや思いがよく伝わってくる。この疎通の中に、生きる深い根が垣間見えてくるところに、この小説の光がある。ボードで会話を

「りずちゃん しあわせよ わたし わかる」
 「そうですか?」
 「いぬのきもちがわかる ちようのうりよく」
 「超能力ですか? 真由美さん、すごい」
 「びようきになつてから わかるようになった」

動物へのたがいの優しさが、病気を超えて、生きるこゝとに対してソフトな肌触りとなつて包んでくるのが、快い。軽妙な文章によって重さが止揚され、夫婦間の不満までもが解消されていくような効果に、一つの成功を感じる。ただ、「無慈悲なマリア」というタイトルは、取つて付けたようで、無理がある。ここを直せば優秀作。「裏の日ハレの日」(島田勢津子) は、演劇にのめり込む夫の現在と、その劇団のかつて花形だった引退した女優の現在を重ねて、過去の演劇空間を振り返る複雑な構造を、うまく組み合わせ、一つの追懐を奏でている。入り組んだ構造を手際よく切り分けているとは言えないが、

を湛えているからだらう。「黄色い潜水艦」そのものの同人雑誌の意義と活動を反映する豊かな記録になつていく。

今季をまとめよう。

優秀作

「桜花忌」萩原紫香 「横」45号

「無慈悲なマリア」藤本あずさ 「黄色い潜水艦」75号

推薦作

「慶長十八年 終わりの始まり」岸本静江 「横」45号

「地獄と坊主」夢酔藤山 「横」45号

「多古城悲話」乾浩 「横」45号

「淡水湖の中の朝鮮」申玄虎 「AMAZON」516号

「石と水の女帝」宝皇女/巻三 皇極女帝」高恭嗣

「AMAZON」516号

準優秀作

「裏の日ハレの日」島田勢津子 「黄色い潜水艦」75号

「過ぎたるは」麻生悠子 「横」45号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)